

寛政十三辛卯

試筆

出づりかき

少月ちゆり

文未菴

徳系結草

雪萬

部系一花の妻



歳暮

中々也

浅茅うさの

あまふ

まふ



聖節

手札也

うさふ

梅の友

太乙楼

不騫



Handwritten mark at the top left corner.

Handwritten mark at the top right corner.

二

曆轴

第分わ河原の地乃

むく千尋

风光

不寒

あし梅も三千丈の勢少松

青陽

香物とりの

風多来つし

翠月館

萬北

花如美



魚

塩〜〜〜

猪の志

北

は〜〜〜

鶏旦

老笔の

白

沙代り

栖風
鉢
蓬
洲



梅の香の

吸ひ起す

しるし

遠州

葉の色

まじりて

白く

歳旦

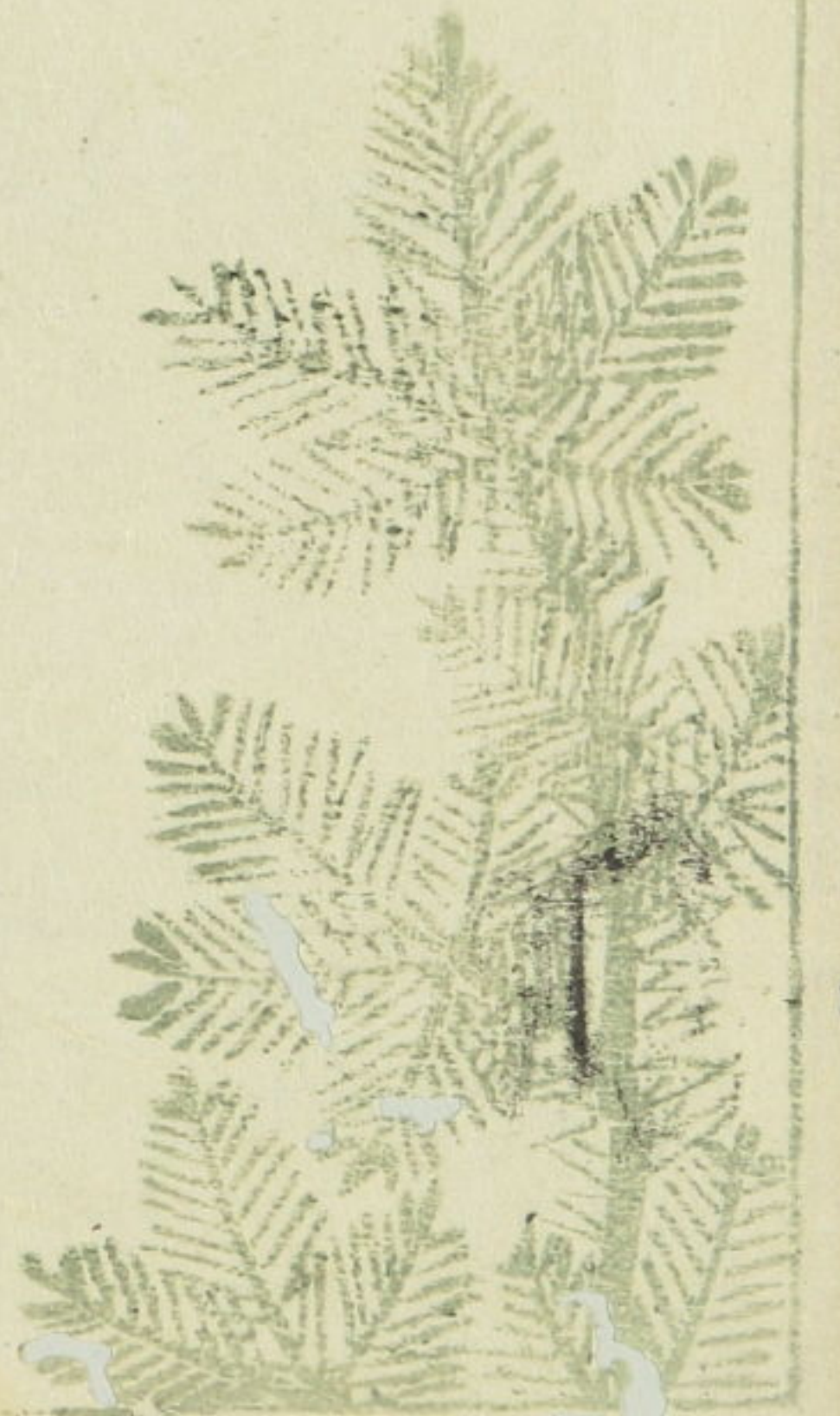
和牛の

佳氣月

和風園

蘭尼

あけちま



正朔

志何世以

結了却了

七月日歌

溪月園

醉步



おろろろ

おろろろ

おろろろ

あふ



明し波也

庭に立ちあがる鏡屑

日影系子

碎歩

船つゝあふく

疾乃海

元旦

祿きまゝ

子未庵

ちんころり
き結

雪萃

祚の巻



雪の尾也

日けりしはり

春休来

雪花

今志付しすら森の

なほし梅月

三始

雪の尾也

多し秋来り

雪の尾也

雪泉館

雪乃曉



上陽

中さうき

朝日さうき

書出の巻

松風園

琴檜女



中さうき

朝日さうき

書出

松風園

琴檜女

朝日さうき



つむぎの
心乃れを圓見ふ

多柳也如

琴指

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~



改旦

七月新

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

不寐舎

甘菜院女

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~





立見の心

松の心なる如く深なる色

若くは老なる心の

若くは

待乳心

覆新

思ふに非代の

来し居る心  
の味

日一庵  
如雲





父の心をかきす  
おのゝ

あかぬと破産の  
如雲  
子もも心くをり

妻風物あつたか  
節松又



十一

元正

眼  
しんじり

まはるるまはるる  
あは

松乃生

聖風  
五葉





蒼天

初

美人乃鏡

梅亭

天府

の



大なる風を眺る

おとよき筑波心

子麻

生垣の鏡

何くし心の





跡一也いつ

其の爲にまをさか



知

まをさか

まをさか

つらまをさか



まをさかのまをさか

まをさか

まをさかのまをさか

まをさかのまをさか

まをさかのまをさか

まをさか

まをさかのまをさか

まをさかのまをさか

まをさかのまをさか

まをさか

まをさかのまをさか

まをさか

まをさか

まをさか



其の山はけし雲は峰のうら

ふ梅のまゝる白髪や父母のま 全 家曉

雪は大雪ふりて月多し

行雲の月より名流柳系 全 多野

夾の風多き川乃入江 全 桑水

莖物被すわりのまこ人 全 青蒲

谷川も喜れ中より雛子のま 全

夾の月暮りふれて鼓如 全 菊舟

山は如流橋けし岩根川

雪と先目をまきせ身おち 下総吉原 全 東流炎

而しを名心月も梅宛中 全 夢地

跡を花咲きのを程大抵 全 梅壽



古川空梅をくはまの深下地 全 千翠

雪の桑戸をぬ風や天の系

鏡子物もあまきれ松 全



望月 幸をばりて

家とよく生れあひて 功曆 可矣

せまきけりけりあむの行おと

やう物や初り 塙りて河東に 免環

内輝物結の五尺とをちれも

候つてや序表を月の三笠山

深月地まの田毎るむきを桶

日の新を果食て結也 移歩 担市

候まのあまうゑの顔とく厚

籠くふ葉やあまの月 歩月

月一燈や人をかつてのう 此市

すくしと葉も月をばり物外

美まやあつ鏡の背井つて 菊浮

ゆちの葉をさして一尺をひ

葉のやあまの序代の葉をあら

幾多代を松うかきて 白菊

松うかきと見れ 国見山



七五

○ 七月 鶴也 三元 加持の 雲と 雲  
日 伏見 直来

市 市 市 市 市 市 市 市 市 市

梅 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市  
上 女 花 梅

梅 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市

あ 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市  
全 一 笑

年 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市

七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市  
全 百 牛

○

吉例 千 万 万 万 万

祝 一 竹 一

水府 堂 燈 菴 連

命 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市  
青 牛

芦 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市

梅 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市

初 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市  
全 襟 江

お 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市

流 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市

喰 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市  
全 吐 聖

人 七 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市

七五



波かへる扇より風の光り系  
全 女界は山を月日むえて妙の面  
全 火くしの市も車乃依る那  
全 夷の海もくまうこくはまを危  
全 天地やたかすしきまを初島  
全 世の垢は流流するはく  
全 雲も風は信者の帆け船  
全 幸は乃夷の山を牛乃ちくま  
全

百和 楚客 四鳥

燦掃や梅より衣名を山かつ  
全 可き程ふや船より掃る硯石  
全 福の如知光の曇も外を  
全 世のきく物も我後冊より本忘  
全 魚はぬ流しより梅の花  
全 一手あくるやも懐けりる声  
全 不らくは云袖押向あうの市  
全 其物類よりきく九お

桂か笑 寛乎



其五

鷺を月冠を花若の妻全 趙水

けり如字多山路のやうに立

見えぬまを如くし月と梅全

人先手たてのうら恵ふ止全 耳谷

望し波也齡の流るる堀もなし

梅も物想のうら恵ふ止全 石占

梅捨てふか倒つともぬれぬの志全

けりともあつて船もあつてか

干細くもあつて浦の物

七月の中物屋風をよむ人の志全 風曲

とくしり流れもあつて人の稽

雲をよむ地り梅もあつて月全

風作の美を花のまじり全 鈴

燦をよむあつて赤代り光る全

そくしりもあつて古障子





一十九

近江左水府

石山の月がさしを月日新 湖水

湖舟中より書き置也さし部

ちきりもわかしく海は津田の先

清浄の身より輝きを月日新 東里

市井のまゝを電もさし乃飯

降ゆる電のさすもわか



東部 太乙橋下

初より梅り合の月日新 一浪

終る如世を元をさし 湖月抄

君の鉢より新きりさし月日新 木奴

坊より如松を神祇の縁也 元忌

紀の月より海をさしん 初辰

芥たより員つて松の横川系 完示

門松物きり枝より元忌礼智信

さきと梅堂ちよれを結り

手れ也心の雲を角田川 牛人

十



画まゝありし多相道の岸重公、  
書柳物拍もろの飯の友 全 草石  
公達の福形を申し表らる

○

古川の汝下あらん落つまき 全 兼文  
妻のれりし志まう彦成 全 和玉  
錦まき思の帯や松の翁 全 玉明  
あらし風一文字を柳 全 奇空

上毛系目

あし梅も素糸しなま露の危 全 芦月  
大凡中おのゝかす修ら海 全 兼空  
名義ハ世の悪かおおは月 全 玉蘭  
そ解や五人の杭り子足 全 兼木  
まゝれあか沙のちらば妻乃月 全 兼玉

○

多々朝れり知川くしたつ硯 全 玉斐  
ほし志流をくしのおん成

深月亭



移り物染むれば恋も流るし

東都台原不連

去後改

あし物子や地万えびく又いさき 秋葉

燦をききわ一行のそさを肩のそく

元日也いり画く不二三 松 待宵

送くむくふとこれ流流流一舟

向の疾風流ききの神代系 楓指

吹しの去るをえ続る善の月

香しけりかか若めし梅り月 桂二

あしあしおとくはくさるる船

おとくはくさるる戦く柳り 富川

おとくはくさるるおとくはくさるる

川松也言のたふる津後あや乃 月彦

上あのさるるしり飛まきり

○

あしあしおとくはくさるる 夕暁



歳末如小島の舟にいでしら  
 多に浪を流す細く杭  
 粧ひ心のきくと花のちる 以年 其棹  
 破る舟也氏をあらす男は子  
 船中夕日を遊り傍る  
 風光の時去りきこれ玉は春  
 哉如いのおまわ源おれそそ念  
 つくはく軒くす葉く

鶯卵のしききく君のた月知 女 花を  
 舟は子のちてきふす拂  
 かよよぬ世はやふ言柳く柳  
 名も清くあま川の初はる 可假  
 翁つと歳のおまわ地もく船  
 香もみちのそまの味えを柳く

つと鼻は是をえくち也 井つ連 良和



あさくも江戸梅の花の日本はし  
ほろ酔も東山しと春の月 魯序  
あさくも梅の花の日本はし  
吹きゆくをすかき春の風 雨原  
美笠のふくしと衣をす  
春風うさきひ子細や妹う許 瑞枝

○  
御きれ宵し新の神馬の如 一与養 又水

くさくさ森の而しを底結梅の

○  
あさくもあさくも成晴し雨の危 林田 又枝

大道の春もあさくし手ら書  
恙物ね少のくはえしとえ  
を川流ね春のまき入る盤山 全 巴境  
近く急をふつふつと急急又  
爽のおや杉の山にぬ那の音



草物香鏡の松乃世の和 斗園  
ひしよの白ひら花や志らるる

上毛松山

か(一)し(一)す(一)む(一)あ(一)ひ(一)れ(一)ま(一)よ(一)の(一)乃(一) 桂志

正月やまふるんちるあ(一)く(一)山(一) 花鏡

三(一)ま(一)さ(一)の(一)取(一)到(一)る(一)お(一)し(一)又(一)ま(一) 宅枝

あ(一)く(一)物(一)物(一)牛(一)の(一)下(一)り(一)ま(一)る(一)を(一)と(一) 舟

草(一)物(一)庭(一)ま(一)さ(一)き(一)く(一)琴(一)つ(一)り(一) 界香

海(一)の(一)刀(一)子(一)は(一)り(一)り(一)七(一)月(一)日(一) 大八木  
本不蒼  
草(一)物(一)鼓(一)の(一)ひ(一)く(一)新(一)下(一)僧(一) 舟

○

海(一)の(一)夕(一)ア(一)一(一)跪(一)は(一)其(一)乃(一)塵(一) 新勅

を(一)ま(一)く(一)き(一)物(一)所(一)光(一)の(一)夕(一)阿(一)し(一) 楽し

投(一)下(一)中(一)あ(一)人(一)物(一)く(一)く(一)物(一)見(一)舟(一) 潮

旭(一)す(一)新(一)と(一)志(一)月(一)系(一)松(一)の(一)妻(一) 子北

子(一)北(一)



十

照し波の鼓乃あくるむおが  
終梅物富為沈の立す  
吹如柳春んふ徳さるれ去  
器さある世定ん見山  
月のお公暈あせと境ふ  
つと柳物西の禿もあはれ

かまろふやうき路ちひし徳を交  
祇伯

三別行柳

○

其の物ふ鼓お、船の中  
糸るはるる一ふ川く柳か

東部  
松房舎

○

くのお人乃る路も松う月  
燐をきや跡のそいし松のあ  
元物あふあふさふ出うつふ  
夕くれやうこれ達鼓のそい  
三つはあはれ素ふ陳おの雲  
布谷

いふ東連

十六



○ 千合此表の海やそそ此醉 馬明

年のるまはくそ八第ふま友が

元り物大姐松の鯉鱗り 全一 羨来

こもらねお焼くさうう條の香

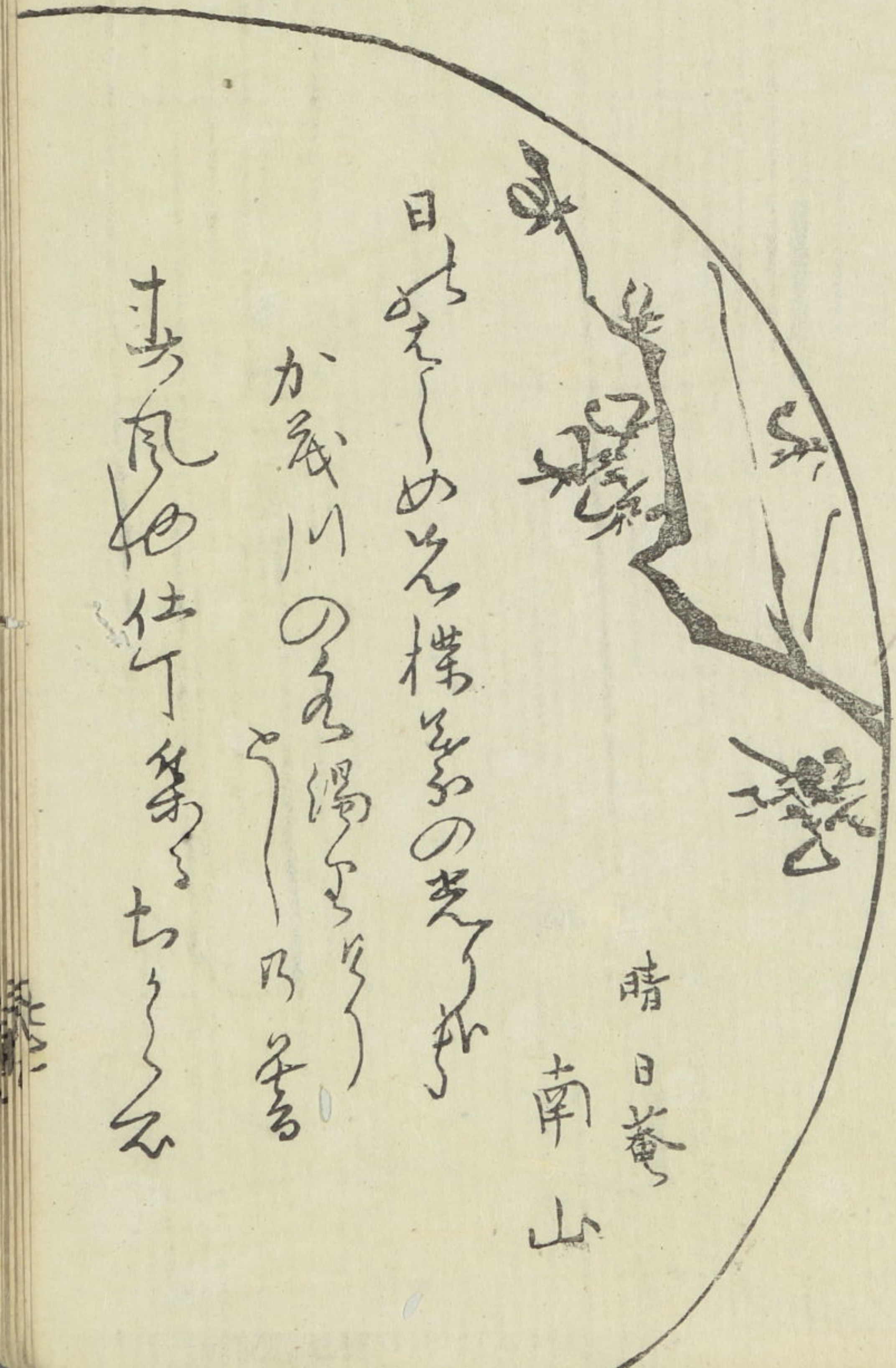
思ちしれ虫流れさお終月 全ハチクラ 赤う咽

宅の日のあやもあより花の美 七の五五戸 赤心

巡りあふ福来りて所是表紙

今此のきやも物し禦紙

あちの葉より相きうちちや表のた



晴日養  
南山

日よそめお様をのさうか

か幾川の名湯ふりり

十歩風物仕下集るちうそ



香摺しるるたるも其の香 東部 起石  
 か茂川のなまゆる物燥あひい  
 左川宮物も代を替るるか松の色 宜風  
 予香あふ人の世をとりあひり  
 万さゆり根ののちをさるる元  
 元日也八千とよまて日本をし 雪荷  
 る部所をしし中の芝をかす  
 杉風の谷へも来りし香の味 香未

香の物 厨下成る茶松の香  
 一粒の取らぬ刻くは海連の味 あきふ  
 香しお香も甲子松おたりが

○年内立春

羽州立江口

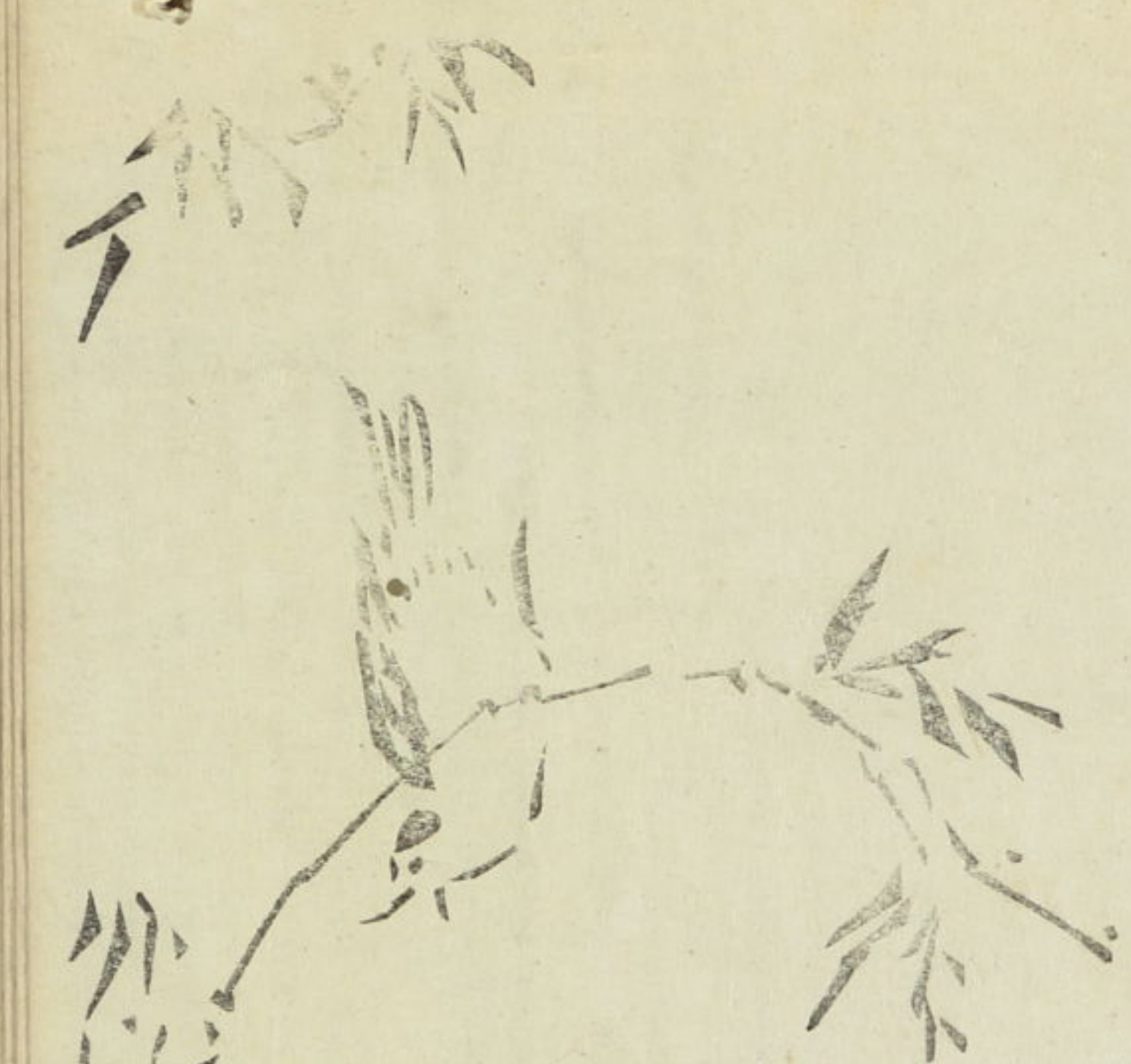
候つる此の気味をさるる松の香  
 松多や葉もかけるる香もあふ  
 恙も松の香もあふるるかみ 全 後友  
 此の香のくちもあふるる日



真洋收

遠東子 錦 ちりり 家 の 桑 里 川  
 ちりり の ちりり 家 を 囀 守 夕 日 外  
 ちりり を 見 ぬ 新 年 一 松 の 浜 柳 深  
 柳 井 の 夕 日 ちりり 夕 日 外  
 二 更 ちりり ちりり ちりり 夕 日 外 志 山  
 香 を 追 っ ちりり 追 っ ちりり 柳 井 外  
 疾 っ ちりり ちりり ちりり 夕 日 外 孤 牛  
 ちりり 柳 井 外 ちりり 柳 井 外

九十二卷 南 瓜  
 ちりり ちりり ちりり ちりり  
 ちりり ちりり ちりり ちりり  
 八十五卷 伏 忌  
 ちりり ちりり ちりり ちりり



梅 子 柳 八十五卷  
 ちりり 柳 井 外 八十五卷  
 柳 井 外 八十五卷  
 ちりり 柳 井 外 八十五卷  
 柳 井 外 八十五卷



東都  
谷守連

妻の月也夫と妻の女子の子に  
 子真  
 系よりなる此の柳の便便少  
 百鏡  
 立也やえおまをてん踏を凡中  
 完所  
 大船の懐の歩を柳口和  
 袖に入るに致しそ手木也

三度中一かきまし便便少  
 五雲  
 世了浦の筑家かられは松きり  
 柳象  
 望し志後々格是り此玉

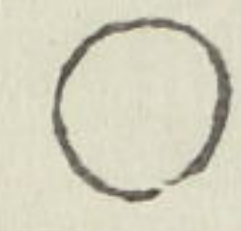
富田連

門松也神す月も竹あり  
 梅仙  
 携えたる燈やきも雪除お神乐  
 人の也高か格をまはあり  
 子れ運ふ家かこは雪のふ  
 柳羨



新より川をくぐり月の子口を  
 杉の日の陰をくぐり高のま女使夫  
 死をくぐり身より塘をくぐりかきし  
 川風をくぐりし梅の雪は月  
 つま草也あらし向くはくを風女急あ  
 妻の風をくぐり進むく二艇を  
 ちりし雪松風まきむ琴のうぐい  
 妻の物を出しけの翁く鞠山松

ちりしくし此繩の中をくぐり船をく  
 妻の物を出しけの翁く鞠山松  
 窓下の雪をくぐり小川所



南港連

法人のちりし日越しんき津の山 漁舟  
 おをくぐりし大越の山越えか  
 山吹れ津也はし舟の神り新 完舟  
 か急也おれ若かり波の波



元物松風いさなりきりきり  
 風とまけいさむぬり乃松  
 元物徳うまのりふく徳  
 千と台強く色旭のかき兼  
 首尾の松とゆもあらん  
 名は元の憲清かあきゆり文  
 孝山と代しの黄ふ和辰  
 普成

吉ふれは北ハ徳トし除おの友



初う物色ふ樹も元ふ多  
 坊とふきまを徳捨いふ  
 吉系の初一集う一年始文  
 藤つま物松を成代の民乃ま  
 江戸川を登くくむし葉の月  
 十寸見  
 河本

墨水連

魁峰

秀河



二十  
山表

茶中此文菊中かきし香の雪 浪舟  
大ふく物松氣をそ深みより 玉指  
墨のれもさる所走る硯系  
元梅のこふかきあま月の風 久字舟  
久さのそくは遠くはりの雪  
りきりやんまも香をたちく仲 芳妙  
はちきりの居るさくら梅の雪  
夢如 新中 されたり立かみ 江右 未大矣

叶を  
林風香  
叶のそくは遠くはりの雪  
中のそくは遠くはりの雪  
美草中 女隣尺五れり  
くはるは如波をさるる大海日  
元旦のそくは遠くはりの雪 五風  
雪し乃終る流る松如風情は  
嫁のそくは遠くはりの雪 一中



日とむらさき梅並ぶるも是も  
 江戸あるが年の梅の植も賣 長徳  
 物至の葉さうとせんし其の道  
 門松物想とむらさき梅並ぶるも  
 夕まきつらとあやぢまといふ  
 神への梅もあつた後、  
 へし梅は六官女あつた月と梅 山家  
 子さおしと梅の二年也二日冬、

水物あつた幸あるま戸川 寸香  
 見さめは梅中、二日通ひ  
 門松のおく山とさうあつた所 香耕  
 岩まきと石をうりつと梅並ぶる

若水物あつた所の縄はさる 文繡  
 大とつと馬の鞍あつた百目鏡  
 江戸あつたの葉もあつた梅の梅



かき鯛也夕くしちかのそりし乾  
すす掃石ふきふりちん金歩障  
美水也屋々富る松の乾  
けりれ巻むりり芙蓉洋  
を川鶴也ゆきふ乾の松る云  
空とへる者の真也候むら

あゝ物物埃一つあゝ方四下  
佳日菴  
束二

葵の夕むしおとせれおまは  
陰はくく日結跡より春るる  
月梅をこれてあま是りり

系幼也出はれ柳名ゆりま  
まゝりあま遊れてあま節季  
葉のあかちんをけり川  
梅もなり根の末をりす  
雲義





吹きおろすとも梅をさるの風 一弛  
春風也かく暖く月を乃身 風化  
彌つるもしそよめ梅をさるる 夢成

けりし物も夢あきし一吐まきく 梅人  
百世の劇をさるし一吐まきく 其逸  
松の戸もさるて交る、おちる月 徒布  
吹すも風外のおとりの希 如人

至風は霞中ありをさる山 不門

方ぬの光おきさる余きく那 寒和  
降しゆしと梅をさるしと重 因歩

梅、花の光おきさる余きく那 寒和  
梅、月をさるしと重 因歩  
治山本をさるしと重 因歩  
枝老



三十一



おを敷おの栢やたるの月 掬ふ  
お栢又ささく栢は茂りか 月叢

○

お栢松山  
五友庵連

初き物外の家路の雪の音 指舟  
さあまの栢はぬ家路の  
うしはなぬ如糸のきり中  
いすつとやき写るる雪はふ二 南照  
照し木栢おのこまの憂ふし

物、鳥物、落、も、馬、を、ぬ、る、あ、ま、い、  
初き如おの栢の糸さめ 布竹  
さしはなれ流れるさしはなれ  
栢、香物、環、る、り、初、く、向、河、家、  
都、を、り、或、解、身、を、り、菜、つ、三、川、 李、蹊、  
さ、し、中、一、栢、さ、る、ん、と、思、ひ、は、

○

東都

唐の何あゝか栢栢の 三翁



春の月経をくぬ世をみんらる  
 多余れ方の月や雪のしるし  
 春物まゝの空はけり  
 雲のまゆつくりと春をほし  
 くらひす也志賀此部の機り音  
 春物や帽子ををる玉はくも  
 布谷 足衣 月歌 一物音 斑象 翠見

七ふしれ杖つきなると花の枝 智的

母の衣はまゝにををる みる

○  
 鏡りし葉ふきわり春のる 藍秋  
 先くれし木のしりる葉相 山崎芳  
 下る葉まゝし川のしりるうか 春存

○  
 春の葉ふきるところに 莊丹  
 春の葉ふきるところに 木丈



其の月御星茶をのかつゝ系 玉屑

梅咲るるこゝの身よりり 一口

眼鏡くけを梅るるくゝ長き日也 中野

伝寺の影くゝ印也梅乃花 故六

見るとして縁を攻る柳の坂 雲歩



梅中見るとお日よふし君の夜 斗明

厨中へきを道はんとし梅の花

かゝりの里

申すまは花御のまゝに國の夜 斗全

そは丸くもものまゝに新雪かきり

身洗ふたへあふりたる川鳥 英巴

照しは院乃魚斎ま我くま存ひけ



これ雪の月おやめけ花乃夜 英女

雪くはを院れはけり梅乃花

雪く雪やめりるるひりさるる 素川

東野  
金谷下連



春の物 塔の麓に 松の礼  
 花より 虫より 花のまじりの友  
 幸の 塔のおき 川を 柳の家  
 春の 物山を 麓を 谷より  
 春の 声より 川より 谷より 松  
 春の 柳より 川より 谷より 松  
 春の 人の 作の 安し 柳の花  
 春の 松より 松より 松乃 風  
 春の 松より 松より 松乃 風  
 小 松

春の 物 塔の 麓に 松の 礼  
 花より 虫より 花の まじり の 友  
 幸の 塔の おき 川を 柳の 家  
 春の 物山を 麓を 谷より  
 春の 声より 川より 谷より 松  
 春の 柳より 川より 谷より 松  
 春の 人の 作の 安し 柳の 花  
 春の 松より 松より 松乃 風  
 春の 松より 松より 松乃 風  
 小 松

○

福の 物 塔の 麓に 松の 礼  
 花より 虫より 花の まじり の 友  
 幸の 塔の おき 川を 柳の 家  
 春の 物山を 麓を 谷より  
 春の 声より 川より 谷より 松  
 春の 柳より 川より 谷より 松  
 春の 人の 作の 安し 柳の 花  
 春の 松より 松より 松乃 風  
 春の 松より 松より 松乃 風  
 小 松

下つた塔也

早



若叶物味とちやめをさしけ

女

花好

お船ありき入船し白き雪解か

鳥御

小舟曳いさ云強千の世をおか

青紙

其約也とよみ蘇と歌くく後

茶縹

梅ありそ月つり蘇ちぬお船

七井

○

遠見厨女

志く物やおき智つをおの夜

その

梅、よのかつと色むやおなら月

三折僕  
千糸

○

若月を物向く水さうまのそ

露水

月さうまはれお船陽田川

、

又くくくくくくくくくくくく

、

十かつり結花とみさうまの味

潮風

お船ありき入船し白き雪解か

、

○

縁を松と柳よ里つりハ

里秀

遠見厨女



○

三十一の星

淋くく人々人あつうの言 抄巻

ちあし夫も逢しはは結植が

あさふ物言結中の多き露 全 菊曉

澄き此中うう月の物言

下えさうさうさ鳥也明り表 全 一鳥

雪しは流よあよさせり候体光

元口也盤を花の葉太らん 全 吹葉

弱下結の香ありし心也表れ月

全

初着也あつしあまれおれ夜 全 方摩

上野あつし挑燈とと表の月

○

井田巻

は梅し指もゆさうつさあま 小 知

○

又去り門うら来りたるの風 燕尾



山と阪の危されば雪解が 八十哉  
やとくしをまかちと氷の氷 在大沢 雪河  
旅子恋梅おきぬ日る深と恋 玉島  
香子さあてる雪さる梅と妻居る家 ちか奴

大尾

山と波のまじり風物

ゆめをる夜

雪中菴

完末

くさひも如伶人も狂い百姓と 宜妻

喜物物人のあつ路乃大徳 沙羅  
雪の雪や根芽は氷る走りか 白麻  
一日張梅歌く余をる那 午心  
淫曳わらわら 這ある雪の中 文足  
吉実志の山并を結る少隣か 和屋  
約し終あつたふ氷の雪るふ 依笠

同門化邦居

浪津

大雪これ不二志する 浪津 友嵐



古くよき思ふれまよ納る如  
胡弓の朝後しりし柳まは  
あゝ風北の気まきけを柳北系  
雪し波の外も深し都を  
枕後蓋

まきくしりし柳まは  
梅ゆきも余雪の身と襟まは

松見舟

新 志系風ふく

志系

連月定會 十一日 廿一日

兼題奈白 廿七日 菴主出席評

會初正月十七日

會納臘月十七日

殘景會 十月十日 雪つ利音

芭並羽速夜 北野音 繪引

柿園會 十一月十五日

貞徳翁 右司 繪引

月並句台

連月廿八日 繪引





